

多世代交流ワークショップ

2010年11月13日 Chatting Art —臨床美術によるワークショップ— うらわ美術館
11月23日 子どもの眼 大人の眼 —つながる心— うらわ美術館

Chatting(おしゃべり) Art —臨床美術によるワークショップ

「Chatting Art」は、(SMFアート楽座)の一つとして二本立てで計画された(多世代交流ワークショップ)の第一弾としておこなわれました。昨年は異なる世代同士でペアを組み、老若男女が一枚の画用紙に絵を描きましたが、今年はペアは組まず、活動中に参加者同士がコミュニケーションできるような内容でした。

導入では、今回のワークショップの描画材料であるオイルパステルの扱い方に慣れるなかで、臨床美術で取り組まれる「アナログ画表現」を体験する活動をおこないました。拳を「ぐっ」とにぎりしめたときの感じ、それを「ふわっ」と開いたときの感じをそれぞれオイルパステルの色と線で表現。初めての経験にとまどう人も見られましたが、一度書き出してしまうと、その自由な表現に夢中になって取り組んでいるようでした。最初は、どのように描けばよいのか、たがいにまわりの様子うかがっているようでしたが、活動が進むにつれて、それぞれの個性や表現の違いを楽しみ、たがいに称賛しながら伸びのびとオイルパステルを走らせていました。

ひととおり「アナログ画表現」を楽しんだ後、講師の小池ちかこさん(臨床美術士)は季節についての話題を持ちかけ、参加者はそれぞれの感じる「秋」についておしゃべり(Chatting)。「やきいも」「くり」といった秋ならではの食べ物から、「紅葉」「落ち葉」「高い空」など視覚的なもの、「寂しさ」「清々しさ」など感情的なものにまでおよびました。さまざまな「秋」が出てきたところで、参加者にイラストボードとマスキングテープが配られました。参加者は近くの人同士で声をかけあ



てペアになり、たがいのイラストボードに交代でマスキングテープを貼っていきま

した。そしてマスキングテープで仕切られたいくつかのスペースに、参加者が出し合ったそれぞれが感じる「秋」の中から講師が指定した項目(例えば「くり」など)を、具象ではなく、導入での活動を生かしてオイルパステルの色と線で表現。それを繰り返して、スペースごとに違う「秋」ができあがっていきま

した。「その色がとてもきれい」、「音が聞こえてきそう」など、個々の活動に夢中になっていた参加者もスペースが埋まっていくにしたがい、たがいの表現のよさをほめ合う声が聞かれました。それぞれの表現について自由におしゃべり(Chatting)しながら活動することの楽しさを十分に感じていたようでした。

参加者全員のイラストボードの全てのスペースがさまざまな「秋」で埋め尽くされた後、最初に貼っていたマスキングテープをはがしました。端をランダムに削ったテープのラインは直線ではなく幅もまちまち。描いたス

ペースのアウトラインも、味のある線として現れました。その形の面白さ、楽しさに参加者の驚きと喜びの声が……。そこには自分だけではなく、他の参加者に貼ってもらったマスキングテープのラインによってつくられたスペースもあることが少なからず影響しているのでしょう。たがいに作品を見せ合い、楽しそうにおしゃべりしあう姿が印象的でした。そして、できあがった作品を展示台に置いての鑑賞会。その際、講師からは展示の条件として「他の人の作品と支え合う」ことが提案され、参加者同士がコミュニケーションしながら展示する様子があちこちに見られました。そして最後にライトダウンされた会場に、鮮やかな発色でありながらも陰影のあるひとつのオブジェが完成したのです。



子どもの眼 大人の眼 —つながる心—

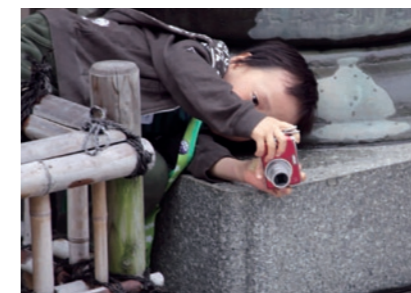
〈多世代交流ワークショップ〉の第二弾「子どもの眼 大人の眼」は写真を素材として、それぞれの物の見方を感じながら活動していくことに主眼をおいた内容でした。ストックホルム在住の塩崎由美子さん(美術家)に講師をつとめていただきました。導入ではまず、参加者それぞれが自分の家やそのまわりであって、気に入っている大切なものや風景を撮影した写真を持ち寄り、たがいに鑑賞しました。ここでも、それぞれの物の見方や趣向が感じられ、参加者同士の会話が弾み、世代を超えたコミュニケーションの場となりました。

次に試し撮りとして、ペアあるいはグループ内でたがいの姿を撮影。初めてカメラをもつ子どももいて、楽しそうに写真を撮って



ました。撮影を始める前に、今回のワークショップで使用するデジタルカメラの簡単な操作方法を説明したのですが、1~2枚の撮影ですっかり使いこなせていたようで、カメラが現代の人にとっていかに身近なものであるかを感じました。

試し撮り撮影会も一段落すると、そろって浦和のまち並みを撮影に出かけました。途中、それぞれのグループはたがいの写真を再生して見せ合ったり、お店の人と交流したりしながら撮影を楽しんでいました。店内を案内して説明してくれたり、道路工事の作業員の方がポーズをとってくれたり、思わ



ぬところでまちの人々とつながることができました。普段まち並みを撮影したことのない人がほとんどで、今回はまちの風景を撮影するだけではなく人と人の交流もでき、とても新鮮な活動であったようです。撮影が進むにつれ、それぞれの視線はさまざまな方向へ広がっていきま

した。看板ばかりを撮影する、地面に落ちているものを探して撮る、まちに生息する生き物を撮り集めるなど、参加者それぞれの活動をくらべて観察するのとても興味深いものでした。子どもたちは夢中になって撮影していましたが、その被写体の多様さや視線の斬新さに、大人たちは感心することしきりでした。一匹の猫をどこまでも追いかけて撮影している子ども、その姿を追いかけて撮影する大人、各世代の感じ方の違いが表れているようでした。

昼の休憩時間をはさみ、午後からはそれぞれが撮影してきた写真をプリンターを使ってさまざまな用紙(マット写真紙、コート写真紙、マーメイド紙、雲竜紙、OHP用紙、画用紙)に印刷し、それをコラージュしながら自分のイメージのまちを形作っていきま

した。壁面に展示しながら、家同士をつなぐ道を作り、そこにまちで撮影した風景を加えていき、さらに広場ができあがり……。参加者同士がコミュニケーションしながら展示する様子があちこちに見られました。

最後に、できあがったみんなのまちを鑑賞。講師はそれぞれの物の見方の多様さ、素晴らしさを称賛し、それぞれの違いがあることの大切さについて語りま

した。参加者からは「子どもの視線や自分とは違った他の大人の見方を知ることによって、普段あまり意識しなくなっていた風景を再認識することができた」との声。大人数で写真を撮り歩くという、普段あまりすることのない活動に新鮮さを感じ、また同じ行動を共有する仲間意識も働いて、よりいっそう交流を深めることができたのではないのでしょうか。子どもたちにとっては、カメラを通して身のまわりを見つめることで、意識して「見る」ということを学べたようです。